

首長墓系古墳の立地分析

——京都府山城盆地・亀岡盆地を例に——

一 はじめに

三世紀末から七世紀初頭にかけての約三〇〇年間は、汎日本的に古墳が築造された時期である。共同体における司祭者的首長は、地位の固定と首長権の世襲を行なうために、前方後円墳（後方墳）や大形円墳（方墳）を築いた。

これらの首長墓系古墳は、古墳時代を通じて築造された古墳の総数からみれば、極めて限られた基数である。例えば、前方後円墳は、畿内全古墳数の三〜四%にすぎないといわれる¹⁾。しかしその規模・内外部施設・副葬品など、他の古墳とは隔絶する内容を有している。古墳時代社会の頂点に立つ首長の造墓行為は、そのまま古墳時代の階層構造の特徴を端的に指し示すものといえよう。

古墳がある地点に築造される際、築造者は偶然その場所を選んだと解せるかもしれない。しかし、造墓は、選地——墳丘・内部主体の構築——死者の埋葬・副葬品の埋納というプロセスにおいて完結するものであり、一連の過程において首長はその司祭者的地位を明確化し得たといえる。こういった前提に立って、造墓プロセスの初期の段階に

相当する選地の実態を記載することによって、首長層による葬送儀礼における空間利用を明確にし、個々の首長墓系古墳が形成する地域の特質を浮き彫りにしたい。すなわち首長墓系古墳の立地およびその分布パターンを分析・検討することによって、古墳時代の墓制・地域社会を解明する一つの手掛かりを得ると考える。

二 古墳立地研究の動向

古墳の立地に関する研究には、大きくみて三つの流れがあるようである。すなわち、A…古墳立地の歴史地理学的研究、B…古墳立地の地形学的研究、C…古墳立地の考古学的研究に整理することができる。

Aの研究についてみると、古墳と平野とを関連付けてその立地パターンに最初に注目したのは三友国五郎（一九三八）^②であった。三友は、「古墳群と平野とは切り離して考えることは出来ない」とし、「開拓可能な沖積平野」の周辺に古墳が立地することに気付いた。その立地の実例を基に「古墳立地の一般的環境」を記載し、立地の目的を明らかにするには、「立地の地理的環境における古墳の形式と量の問題」が問われねばならないとした。また古墳立地の主目的を、耕地の分布する平野の尊重と土地への執着と解した^③。同様の観点から伊達宗泰（一九六三）^④は、「古墳を築造せしめた営力の基礎である生産地域」を念頭において、墳丘規模、内部構造、出土遺物の質・量および立地環境など古墳の諸属性と、被葬者の勢力圏、生活圏の相互の関係を描き出そうとした。そして奈良盆地周辺での事例から古墳築造の立地条件を非生産地域とした。

Bの研究では日下雅義（一九七五）^⑤の研究がある。氏は「古代の地形環境」に検討を加えることを目的にして、「応仁天皇陵」の選地と後の地形変化を説明した。さらに原秀禎（一九八一）^⑥は、同様の視点から「古墳の立地する

地形面」を詳細に検討し、大規模前方後円墳の立地を段丘崖の走向や開析谷など、地形環境と関連付けて考察している。

以上、歴史地理学的・地形学的研究の分野では、古墳という遺跡の空間占有の形態を把握しようとする方向性を持つのに対し、Cの古墳立地の考古学的研究では、大筋として立地の記載と考察、および古墳の類型化作業が、古墳時代地域論・構造論を補助する役割を果たしているといえる。例えば、白石太一郎(一九六九)^②は百舌鳥および古市など大型古墳群の消長をたどるために、三〇〇分の一の詳細な地形図から古墳群の原地形復元図を作製し、古墳築造に際しての地形条件について評価を加えた。田中晋作(一九八三)^③は畿内における古墳の群構造の変遷をたどったが、古墳が属性として持つ諸要素の分類基準が具体的に明らかにされていない。和田晴吾(一九八一)^④は測量調査報告の中で、山城盆地の古墳立地を概観した後、古墳時代後期の立地についての意味付けを行なった。その内容は後期において現れる古墳立地の地域的差異が、前・中期の場合と違い「同一時期に存在した豪族層それぞれの歴史的、政治的性格の差を強く反映する」というものであった。

このように、地形条件を考慮にいったオーソドックスな立地論・分布論が記載される中で、櫃本誠一(一九八三)^⑤は古墳の築造企画を検討する上で、旧地形と墳丘の関係を明らかにしようという、ある意味で古代の地形改変の問題と古墳立地の接点を模索している。

櫃本のミクロな視点に対して、マクロなオーダーでの研究例では岸本道昭(一九八六)^⑥が兵庫県事例で古墳立地の類型化にアプローチしている。その中では弥生時代末から古墳時代前期にかけての小河川流域における古墳築造集団間の関係が考察され、それに立地類型・規模の評価が加味されている。また、今尾文昭(一九八七)^⑦が古墳立

地の定性的記載による類型化を行なっている。

以上、A、B、Cの研究成果について順を追ってみてきた。これらの研究の流れから、古墳立地についての主たる解釈は次のように纏めることができる。一つは生産基盤としての沖積低地と古墳の有機的関係に古墳立地の要因を求めめるものであり、今一つは古墳築造者集団における序列・階層構造が古墳の選地に当たって反映されるとする流れである。

これらの研究の方向に共通していえることは、若干の事例を除いて、古墳立地の定性的な記載から立地要因を導くことに重点がおかれ、古墳立地を構成する属性の定量的な検討があまり成されていないことである。古墳についての定量的研究については、石川昇（一九八二、一九八四、一九八五a、一九八五b、一九八七）^⑧や辰巳和弘（一九八二）^⑨、高橋誠一（一九八七）^⑩など、近年新しい視点の導入がある。これらは古墳を構成する諸要素の一つに挙げ得る墳丘規模（体積・面積など）に対する評価である。しかしながら古墳立地そのものを定量的に把握しようとする試みは、ほとんどなされていないのが現状である。古墳立地の様々な要因の解釈を進める前段階の基礎的な作業として、立地の定量的検討を行なう必要がある。

三 方 法

古墳を特徴付ける属性には墳丘の形態・規模、内・外部施設、副葬品、立地などがあるが、ここでは古墳の立地属性の定量的検討を行なう。今回は山城盆地の首長墓系古墳八五基および亀岡盆地の一四基^⑪を対象に、立地を表わす要素（比高・視界のランク・サイズ）の組み合わせから立地類型を設定し、古墳の属性の一つである墳丘規模と立地類

盤としての沖積低地や段丘などの平坦面と、古墳との垂直的関係が数値化され得る。比高の数値が小さい場合、生産生活面との隣接性が考えられ、逆に数値が大きい場合、それらとの隔絶性をいうことができる。

B 視界（眺望角） 古墳と最寄りの低地との垂直的関係が比高で表されるならば、水平的関係は、古墳からの視界によって表現される。例えば、平野に向かって張り出した丘陵上の立地と河谷を望む丘陵裾部の立地を比較してみ



図1 地域概念図

型相互の関係、立地類型の盆地内における分布パターンなどを明らかにする。また、立地類型による検討の有効性を検定するために、古墳の規模と立地属性の相互関係について、あわせて相関分析 (correlatom)・重回帰分析 (regression) を行なった。図1に山城盆地・亀岡盆地の位置を示す。

A 比高 古墳立地において、ある特定の地形面が選択される場合、古墳はその立地する面と下位の面との比高（高低差）によって垂直的な位置付けが可能となる。すなわち、最寄りの生産・生活基

ると、平野に対する視界がおのずと異なることが容易に想像できよう。前者は、周辺地形が視界を遮ることのない、墳丘からの眺望の良さと、周辺地域から古墳への視認の良さがいえる。これに対し、後者は平野に対する狭い視野と平野部からの視認性の悪さが指摘できよう。

視界（眺望角）の記載方法については、盆地を貫流する主河川・大地形としての顕著な河谷低地¹⁵を最大限遠くまで見通せるエリアを地形図（精度…一万分の一オーダー）上に求めた。そのエリアは古墳が立地している面と同一の地形面上における同じ高さの扇形として認識される¹⁶。したがって、扇形の中心角が古墳から平野に向けられた眺望角として記載される。古墳からの視界である扇形範囲内であれば、低地からは逆にその古墳を絶えず見上げることになる。

AおよびBの記載によって、古墳は垂直的かつ水平的な位置が把握されるものと考ええる。比高・視界の数値はランク・サイズで区分し、比高ランクと視界ランクの組み合わせによって立地類型を設定した。ランク・サイズ区分にあたっては、比高、視界の数値の大きいものから小さいものまで順（1→n）に序列化し、不連続となる部分を境として、グルーピングした。さらに立地類型の分布ならびに古墳規模と立地類型の関係などを検討した。

C **古墳の規模と立地属性の相関関係** 古墳の規模（全長）と比高および視界のデータをもとに、相関分析を行ない、それぞれの要素間の相関を調べた。ついで重相関分析では、従属変数を古墳規模、独立変数を立地属性とした重回帰モデルにより重回帰係数を導きだした¹⁷。また、得られたデータの古墳時代前期から後期にかけての推移を検討した。

古墳立地の時系列的変遷をたどるには、古墳の築造された年代が問題となるが、大塚他編（一九七二）、平良他編

(一九七二)、奥村(一九八四)、平良他(一九八五)、平良(一九八五)などの文献を参考にした²⁰⁾。時期については古墳時代前期・中期・後期の三分とする。

四 首長墓系古墳の立地分析

(一) 山城盆地における首長墓系古墳の立地分析

山城盆地は南北四〇キロメートル、東西三〜一二キロメートルの狭長な断層盆地である。盆地の地形配列は、外縁から順に山地、丘陵、段丘・扇状地、沖積低地(氾濫原)となる。盆地内には周辺の後背地から諸河川が流入し、盆地のほぼ中央に位置する旧巨椋池の西側で合流した後、大山崎地峡部を経て大阪方面へ流出する。巨椋池の北側、すなわち桂川・鴨川・高野川などの流域を山城盆地北部(狭義の京都盆地)、巨椋池の南側、すなわち木津川流域を山城盆地南部と呼ぶことにしたい。

山城盆地全域では、首長墓系古墳は総数八五基を数える。これは前方後円(方)形、帆立貝形の平面形をとる古墳七二基に、直径(辺長)三五メートルを越える円(方)墳を加えた数である。

(1) 比高・視界のランク・サイズ

比高のランク・サイズは、古墳時代前期が三ランク(上位から順にA、B、C)、中・後期が四ランク(A、B、C、D)に分かれる。視界では、前・中期四ランク(A、B、C、D)、後期が三ランク(A、B、C)に区分される。また各古墳の立地する地形面、古墳の全長などのデータとともに比高・視界の数値を表1に示す。

(2) 古墳立地類型

ける首長墓系古墳

| No. | 古墳名 | 形態 | 立地 (地形面) | 時期 | 全長 (m) | 標高 (m) | 比高(m) [地形面] | 視界(°) (眺望角) | |
|---------------------|-------|------|-------------|----|-----------|-----------|----------------|----------------|---------|
| 42 | 箱塚 | 後円 | 段丘 | 中 | 60 | 18.5 | 4.8 | 116°50' | |
| 43 | 芝ヶ原6号 | 後円 | 丘陵・端 | 中 | 45 | 40.5 | 18.5 | 195°0' | |
| 44 | 宮ノ平3号 | 帆立 | 丘陵・端 | 中 | 38 | 45.0 | 6.5 | 158°20' | |
| 45 | 芝ヶ原5号 | 後円 | 丘陵・端 | 中 | 34 | 40.0 | 18.0 | 195°0' | |
| 46 | 赤塚 | 帆立 | 段丘 | 中 | 22 | 28.0 | 12.8 | 193°10' | |
| 47 | 坊主山1号 | 後円 | 丘陵・頂 | 後 | 45 | 50.0 | 16.0 | 111°30' | |
| 48 | 長池 | 後円 | 丘陵・端 | 後 | 50 | 60.0 | 9.8 | 157°0' | |
| 49 | 胃山1号 | 後円 | 丘陵・端 | 後 | 30 | 80.0 | 20.2 | 93°10' | |
| 50 | 青谷丸山 | 後円 | 丘陵・端 | 後 | 30 | 80.0 | 10.5 | 28°50' | |
| 51 | 西山1号 | 後方 | 丘陵・稜 | 前 | 約80 | 48.7 | 20.9 | 172°40' | |
| 52 | 青塚 | 後方 | 丘陵 | 中 | 約49 | 27.8 | 13.1 | 145°40' | |
| 53 | 上大谷8号 | 後方 | 丘陵・稜 | 前 | 34 | 64.0 | 21.1 | 73°20' | |
| 54 | 上大谷1号 | 後方 | 丘陵・稜 | 後? | 34 | 70.0 | 27.3 | 80°0' | |
| 〔木津川左岸：綴喜郡・相楽郡〕 | | | | | | | | | |
| 55 | 西車塚 | 後円 | 丘陵・稜 | 前 | 115 | 24.0 | 14.0 | 127°30' | |
| 56 | 東車塚 | 後円 | 丘陵・稜 | 前 | 94 | 15.3 | 4.0 | 119°50' | |
| 57 | 石不動 | 後円 | 山地・頂 | 前 | 75 | 93.6 | 56.0 | 114°40' | |
| 58 | 飯岡車塚 | 後円 | 独立丘陵 | 前 | 86 | 40.1 | 21.5 | 197°30' | |
| 59 | 興戸1号 | 後円 | 丘陵・稜 | 前 | 24 | 86.7 | 44.4 | 206°30' | |
| 60 | 王塚 | 帆立 | 丘陵 | 中 | 70 | 48.0 | 25.2 | 109°40' | |
| 61 | 大住南塚 | 後方 | 段丘 | 中 | 66 | 26.7 | 8.9 | 186°40' | |
| 62 | 吐師1号 | 帆立 | 段丘 | 中 | 55 | 40.8 | 10.9 | 178°10' | |
| 63 | 吐師2号 | 帆立 | 段丘 | 中 | 43 | 40.8 | 10.9 | 178°0' | |
| 64 | 吐師4号 | 帆立 | 段丘 | 中 | 35 | 40.6 | 13.1 | 173°30' | |
| 65 | 吐師5号 | 帆立 | 段丘 | 中 | 28 | 40.6 | 13.1 | 174°30' | |
| 66 | 上人ヶ平 | 帆立 | 丘陵・端 | 中 | 23 | 55.0 | 9.1 | 111°20' | |
| 67 | 大谷2号 | 後円 | 丘陵・稜 | 後 | 20 | 72.8 | 30.9 | 43°10' | |
| 68 | 岡村 | 後円 | 段丘 | 中 | 30 | 26.0 | 9.0 | 167°10' | |
| 69 | 天神山3号 | 後円 | 丘陵・稜 | 後 | 25 | 85.0 | 30.1 | 149°40' | |
| 70 | 天神山5号 | 後円 | 丘陵・稜 | 後 | 30 | 75.0 | 10.1 | 170°40' | |
| 71 | 茶白山 | 後方 | 丘陵・稜 | 前 | 50 | 80.0 | 61.0 | 287°40' | |
| 72 | 大住車塚 | 後方 | 段丘 | 中 | 62ca | 25.0 | 7.2 | 191°0' | |
| | | | | | 直径 辺長 | | | | |
| 大形 円墳 ・ 方墳 | 百々池 | 円墳 | 丘陵・稜 | 前 | 50 | — | 80.0 | 40.0 | 112°50' |
| | 牛廻り | 円墳 | 丘陵・稜 | 後 | 50 | — | 50.0 | 14.0 | — |
| | 今里大塚 | 円墳 | 段丘 | 後 | 45 | — | 40.0 | 5.0 | 229°0' |
| | ヒル | 方墳 | 段丘・端 | 中 | — | 45 | 20.0 | 8.4 | 142°0' |
| | 金比羅山 | 円墳 | 丘陵・端 | 中 | 40 | — | 45.0 | 11.0 | 98°10' |
| | 二子山1号 | 円墳 | 丘陵・頂 | 中 | 42 | — | 65.0 | 30.0 | 117°10' |
| | 鍛冶塚 | 方墳 | 段丘 | 中 | — | 49.7 | 31.4 | 12.9 | 184°40' |
| | 丸塚 | 円墳 | 丘陵・端 | 中 | 66 | — | 40.0 | 5.1 | 200°10' |
| | 尼塚 | 方墳 | 丘陵・端 | 中 | — | 40 | 40.8 | 20.5 | 112°0' |
| | ゴロゴロ山 | 円墳 | 独立丘陵 | 中 | 38 | — | 61.0 | 34.7 | 209°50' |
| 鞍岡山3号 | 円墳 | 丘陵・頂 | 中 | 40 | — | 88.4 | 44.2 | 142°10' | |
| 一本松 | 円墳 | 丘陵・稜 | 前 | 35 | — | 130.0 | 95.1 | 203°20' | |
| 庵寺山 | 円墳 | 丘陵・稜 | 中 | 56 | — | 75.0 | 40.0 | 221°40' | |

形態の略記：後円＝前方後円墳、後方＝前方後方墳、帆立＝帆立貝式古墳

表1 山城盆地にお

| No. | 古墳名 | 形態 | 立地 (地形面) | 時期 | 全長 (m) | 標高 (m) | 比高(m) [地形面] | 視界(°) (眺望角) |
|--------------------|--------|----|-------------|----|-----------|-----------|----------------|----------------|
| 〔桂川左岸：葛野郡・愛宕郡・紀伊郡〕 | | | | | | | | |
| 1 | 蛇塚 | 後円 | 丘陵 | 後 | 75 | 33.3 | 1.5 | 169°30' |
| 2 | 天塚 | 後円 | 扇状地 | 後 | 71 | 30.0 | 1.5 | 162°50' |
| 3 | 垂箕山 | 後円 | 丘陵 | 後 | 63 | 41.0 | 9.0 | 158°50' |
| 4 | 清水山 | 後円 | 丘陵 | 後 | 60 | 31.0 | 1.5 | 135°20' |
| 5 | 太奏馬塚 | 後円 | 丘陵 | 後 | 50 | 46.0 | 16.5 | 199°10' |
| 6 | 段ノ塚 | 後円 | 氈蓋原 | 中 | 75 | 27.0 | 0 | 126°20' |
| 〔桂川右岸・小畑川左岸：乙訓郡〕 | | | | | | | | |
| 7 | 一本松塚 | 後円 | 丘陵・頂 | 前 | 100 | 94.0 | 54.0 | 182°20' |
| 8 | 天皇の社 | 後円 | 扇状地 | 前 | 86 | 45.0 | 12.0 | 175°30' |
| 9 | 妙見山 | 後円 | 丘陵・稜 | 前 | 114 | 68.5 | 30.6 | 328°10' |
| 10 | 寺戸大塚 | 後円 | 丘陵・稜 | 前 | 98 | 76.5 | 39.0 | 278°55' |
| 11 | 五塚原 | 後円 | 丘陵・頂 | 前 | 94 | 69.7 | 27.9 | 322°40' |
| 12 | 北山 | 後円 | 丘陵斜面? | 前 | 65 | 37.6 | 7.4 | 113°10' |
| 13 | 穀塚 | 後円 | 扇端 | 中 | 41 | 29.0 | 2.0 | 135°0' |
| 14 | 天鼓ノ森 | 後円 | 氈蓋原 | 後 | 60 | 27.5 | 0 | 199°10' |
| 15 | 清水塚 | 後円 | 氈蓋原 | 後 | 50 | 28.0 | 0 | 193°30' |
| 16 | 物集女車塚 | 後円 | 段丘・端 | 後 | 45 | 22.0 | 0.8 | 112°10' |
| 17 | 元稲荷 | 後方 | 丘陵・頂 | 前 | 94 | 53.0 | 17.1 | 330°50' |
| 〔桂川右岸・小畑川右岸：乙訓郡〕 | | | | | | | | |
| 18 | 鳥居前 | 帆立 | 山地・稜 | 前 | 50 | 90.0 | 73.5 | 154°0' |
| 19 | 芝1号 | 後円 | 段丘・端 | 中 | 33 | 50.0 | 5.6 | 152°40' |
| 20 | 恵解山 | 後円 | 段丘・端 | 中 | 120 | 23.8 | 3.4 | 137°20' |
| 21 | 今里車塚 | 後円 | 谷底平野 | 中 | 74 | 27.3 | 0 | 187°40' |
| 22 | カラネガ岳 | 帆立 | 山地・稜 | 中 | 36 | 164.2 | 110.6 | 175°0' |
| 23 | 今里舞塚 | 帆立 | 段丘 | 後 | 45 | 33.7 | 8.5 | 159°0' |
| 24 | 稲荷塚 | 後円 | 段丘 | 後 | 45 | 43.5 | 5.1 | 184°10' |
| 25 | 非ノ内車塚 | 後円 | 段丘 | 後 | 37 | 47.7 | 2.3 | 160°40' |
| 26 | 塚 | 後円 | 段丘 | 後 | 30 | 19.0 | 5.5 | 32°20' |
| 27 | 長法寺南原 | 後方 | 山地・頂 | 前 | 61 | 147.0 | 94.2 | 173°40' |
| 〔宇治川右岸：宇治郡〕 | | | | | | | | |
| 28 | 黄金塚2号 | 後円 | 丘陵・端 | 中 | 120 | 42.8 | 22.8 | 195°40' |
| 29 | 黄金塚1号 | 後円 | 丘陵・端 | 中 | 100 | 42.8 | 22.8 | 195°40' |
| 30 | 番神山 | 後円 | 段丘 | 中 | 45 | 37.5 | 7.5 | 137°10' |
| 31 | 池山 | 帆立 | 丘陵・頂 | 中 | 44 | 60.0 | 38.2 | 110°30' |
| 32 | 長法寺南原 | 後円 | 段丘 | 後 | 105 | 26.0 | 8.8 | 219°0' |
| 〔木津川右岸：久世郡・相楽郡〕 | | | | | | | | |
| 33 | 梅の子塚 | 後円 | 丘陵・稜 | 前 | 79 | 60.0 | 39.8 | 176°50' |
| 34 | 西山7号 | 後円 | 丘陵・頂 | 前 | 60 | 57.6 | 29.8 | 142°40' |
| 35 | 尼塚4号 | 後円 | 丘陵・頂 | 前 | 37 | 60.0 | 21.2 | 192°10' |
| 36 | 椿井大塚山 | 後円 | 丘陵・端 | 前 | 180 | 53.3 | 23.5 | 172°0' |
| 37 | 平尾城山 | 後円 | 丘陵・稜 | 前 | 108 | 85.2 | 65.7 | 187°20' |
| 38 | 丸山 | 後円 | 丘陵・端 | 中 | 37 | 47.5 | 21.7 | 90°10' |
| 39 | 久津川車塚 | 後円 | 段丘 | 中 | 183 | 34.9 | 13.3 | 193°50' |
| 40 | 芭蕉塚 | 後円 | 段丘 | 中 | 118 | 27.8 | 13.0 | 179°0' |
| 41 | 芝ヶ原11号 | 帆立 | 丘陵斜面 | 中 | 66 | 45.9 | 23.9 | 179°10' |

前項で区分された比高・視界ランク・サイズを組み合わせることによって、大きく四つの立地類型を設定し得た。

I類…比高・視界ともに良好なタイプ

II類…比高が特にすぐれるタイプ

III類…視界が特にすぐれるタイプ

IV類…比高・視界ともに低い(狭い)タイプ

また、それぞれの類型の中での相対的なランクの優劣によって、a・bの二つに分けることができる。このようにして立地類型により前期古墳を五類、中期古墳を八類、後期古墳を七類に分類することができた。なお、古墳に付した番号()は、表1に対応する。

〔前期古墳立地類型〕

・ Ia類(比高A・視界B)(A・B) … 妙見山古墳(九)、寺戸大塚古墳(二〇)、五塚原古墳(二二)、茶臼山古墳(七二)、
一本松古墳(二)

・ IIa類(A・D)(A・C) … 一本松塚古墳(七)、鳥居前古墳(二八)、西山七号墳(三三)、椿井大塚山古墳(三六)、平尾
城山古墳(三七)、石不動古墳(五七)、興戸一号墳(五九)、百々池古墳

・ IIb類(B・D)(B・C) … 尼塚四号墳(三三)、西山一号墳(五九)、上大谷八号墳(三三)、飯岡車塚古墳(五九)

・ IIIa類(C・A) … 元稻荷古墳(一七)

・ IVa類(C・C)(C・D) … 天皇の杜古墳(八)、北山古墳(三三)、西車塚古墳(五五)、東車塚古墳(五五)、大住南塚古

墳(六一)

〔中期古墳立地類型〕

- ・ Ia 類 (A・A) (A・B) .. カラネガ岳古墳(三三)、ゴロゴロ山古墳、庵寺山古墳
- ・ Ib 類 (B・A) (B・B) .. 黄金塚一・二号墳(三九・三六)、芝ヶ原五・六・一・一号墳(四二・四三・四四)
- ・ IIa 類 (A・D) .. 池山古墳(三三)、鞍岡山三号墳
- ・ IIb 類 (B・D) .. 丸山古墳(三六)、王塚古墳(三六)、二子山古墳
- ・ IIIa 類 (C・A) (D・A) .. 今里車塚古墳(三三)、久津川車塚古墳(三九)、赤塚古墳(四六)、大住車塚古墳(三三)、丸塚古墳

・ IIIb 類 (C・B) (D・B) .. 芭蕉塚古墳(四〇)、吐師一・二・四・五号墳(三三・三五)、鍛冶塚古墳

・ IVa 類 (C・C) .. 青塚古墳(三三)

・ IVb 類 (C・C) (D・D) .. 段ノ塚古墳(六)、穀塚古墳(三三)、芝一号墳(二九)、恵解山古墳(三〇)、番神山古墳

(六六)、岡村古墳(六六)、ヒル塚古墳、金比羅山古墳

〔後期古墳立地類型〕²²⁾

- ・ Ia 類 (A・A) (A・B) .. 上大谷一号古墳(五五)、天神山三号墳(六九)
- ・ Ib 類 (B・B) .. 太秦馬塚古墳(五五)、冑山一号墳(四九)
- ・ IIa 類 (A・C) .. 大谷二号墳(六七)
- ・ IIIa 類 (C・A) (D・A) .. 蛇塚古墳(二)、天塚古墳(三三)、垂箕山古墳(三三)、天鼓ノ森古墳(四四)、清水塚古墳(二五)、今里舞塚古墳(三三)、稻荷塚古墳(二四)、井ノ内車塚古墳(二五)、二子塚古墳(三三)、長池古墳(四八)、天神山五号

墳(七)、今里大塚古墳

・Ⅲb類 (D・B) .. 清水山古墳(四)、物集女車塚古墳(一六)

・Ⅳa類 (C・C) .. 青谷丸山古墳(五)

・Ⅳb類 (D・C) .. 塚本古墳(一六)

(3) 古墳立地類型の分布パターン (図2)

〔前期〕 I類(五・二〇・二・七)は向日丘陵の尾根上と八幡丘陵、すなわち山城盆地北部を中心に分布する。これに対し、II類は主に山城盆地南部・木津川流域に分布する傾向にある。とくにIIb(三・三・五・三・五)は木津川右岸と飯岡の独立丘陵上にのみ分布する。IV類は丘陵鞍部・緩斜面上に立地するものであり、向日丘陵(八・三三)、八幡丘陵縁辺(五・五・六)にみられる。各類の比率は、I類五基、(一九%)、II類十五基(五八%)、III類一基(四%)、IV類五基(一九%)である。

〔中期〕 II類は木津川流域を中心に分布し、山城盆地北部には例をみない。IV類の分布はII・III類の分布域とは対称的に、山城盆地北部で目立つ。I類八基(二三%)、II類五基(一四%)、III類一一基(三二%)、IV類一一基(三二%)を数える。

〔後期〕 I類III類の分布には地域的な差異が認められる。I類は主に木津川右岸に分布の中心があるのに対し、III類は山城盆地北部、桂川兩岸に分布する。I類は五基(二四%)、II類は一基(五%)、III類二三基(六二%)、IV類二基(一〇%)の構成比となり、I・III類が主体である。

(4) 古墳立地類型と墳丘規模(全長)の関係(図3)

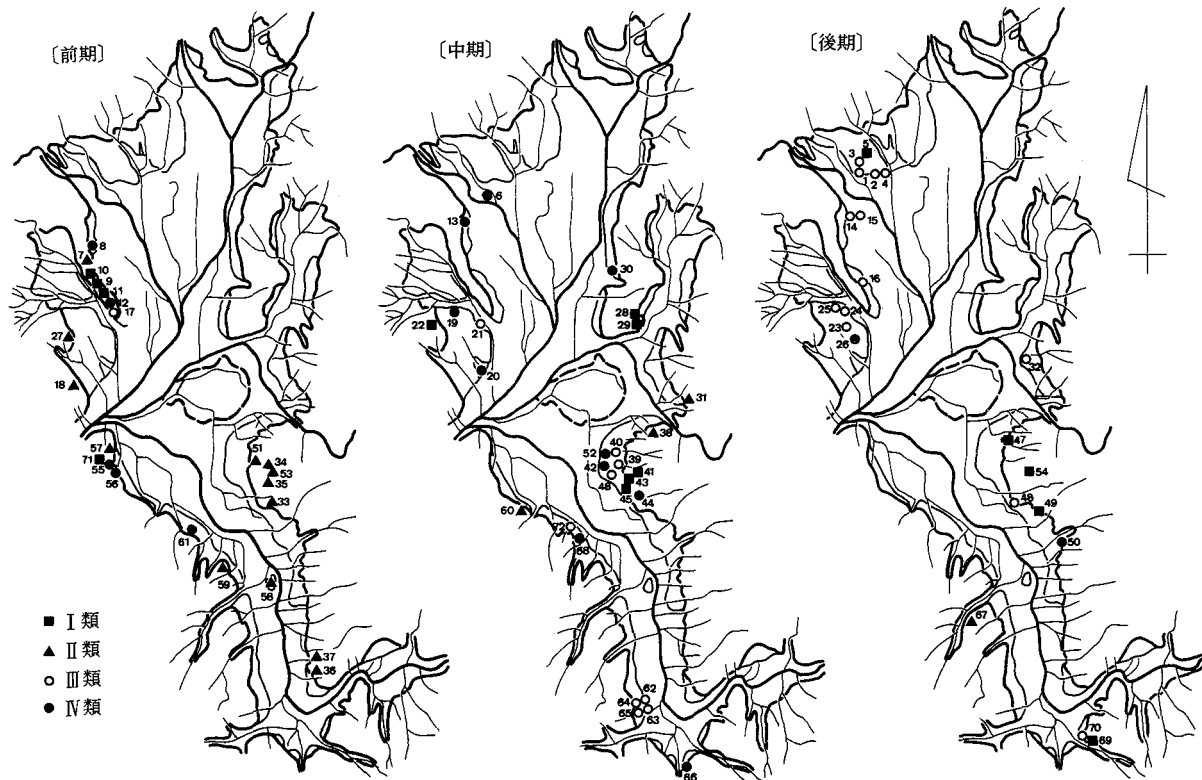


図2 山城盆地における古墳立地類型の分布パターン

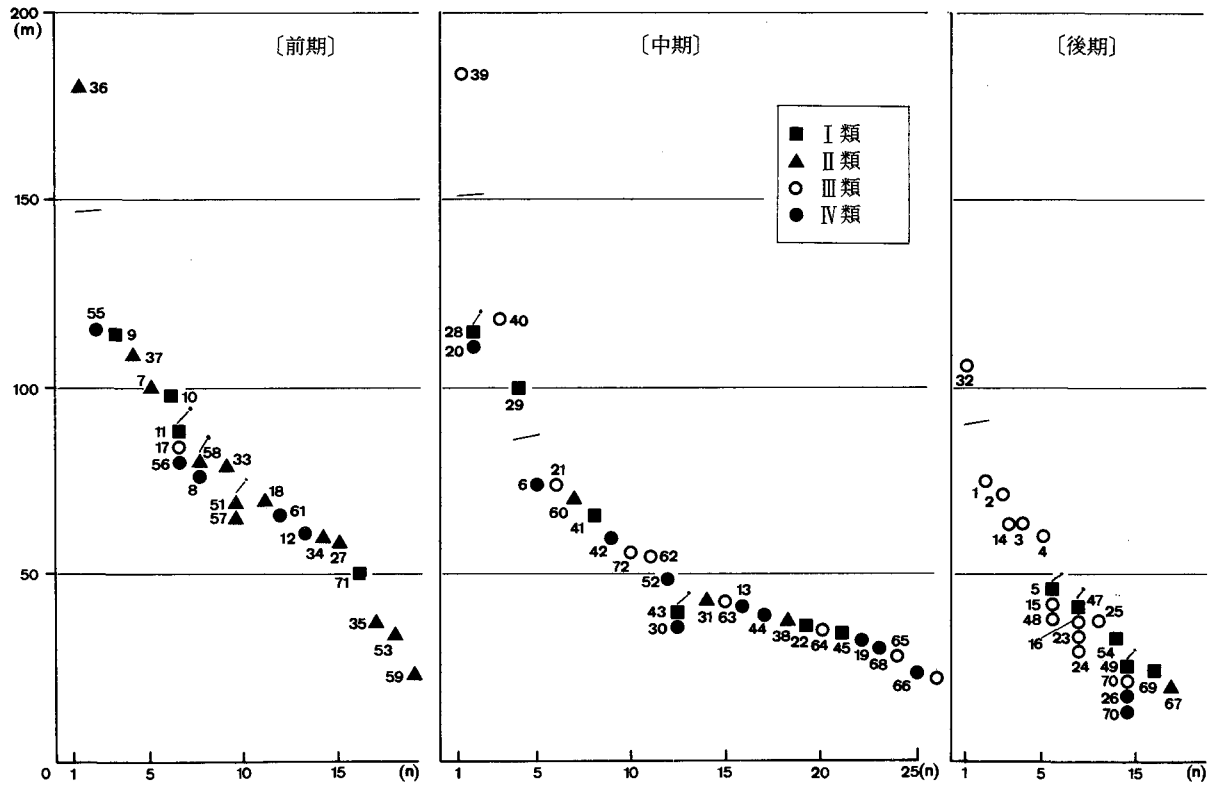


図3 山城盆地における古墳立地類型と墳丘規模（全長）との関係

〔前期〕 墳丘規模は大きく二ランクに分けられる。Ⅱa類は最大規模の椿井大塚山古墳(三六)から全長二四メートルたらずの興戸一号墳(三五)まで該当しており、規模と立地類型の有意の相関が見出せない。他の類型も同様の傾向を示している。

〔中期〕 墳丘規模は三ランクに分けられる。Ⅲ類をみると中期最大規模の久津川車塚古墳から最小の赤塚古墳(四六)まで認められることから、規模と立地類型との相関はいえない。他の類型についても同様である。

〔後期〕 後期は前・中期とは様相を異にする。墳丘規模は二ランクに分かれる。墳丘の最大規模の二子塚古墳(三三)から上位六位までの古墳はすべてⅣ類であり、大形墳の立地類型にまとまりがみられる。これに対し、小形墳はⅠ類と対応する。かかる墳丘規模と立地類型の相関は、前節で述べた古墳の地理的分布の傾向との関係をも指摘できる。すなわち、Ⅲa類の大形墳はすべて山城盆地北部に分布し、Ⅰ類小形墳(四七・四八・四九)は盆地南部に分布する。

古墳時代前・中期において墳丘規模と立地類型とに顕著な相関が認められないのに対し、後期には規模・立地類型・分布相互に相関性が出てくるのが指摘できよう。

(5) 古墳からの視界と立地類型(図2・4)

図4は古墳からの視界を方位角として扇形で表現し、次に扇形方向に基づき、古墳間で見通し可能とみられるものをすべて線分(眺望関係線)で結んだ図である²³⁾。古墳は下位の平坦面・主に沖積低地から眺められるものであり、選地に当たっては古墳を望み得る範囲が考慮されたと考えられる。ここでは古墳相互の視界の関係と立地類型の分布パターンについて検討を加えてみたい。

〔前期〕 古墳からの視界は盆地内部へ向け広域に広がっている。木津川流域のⅡ類の古墳では、水系もしくは地形

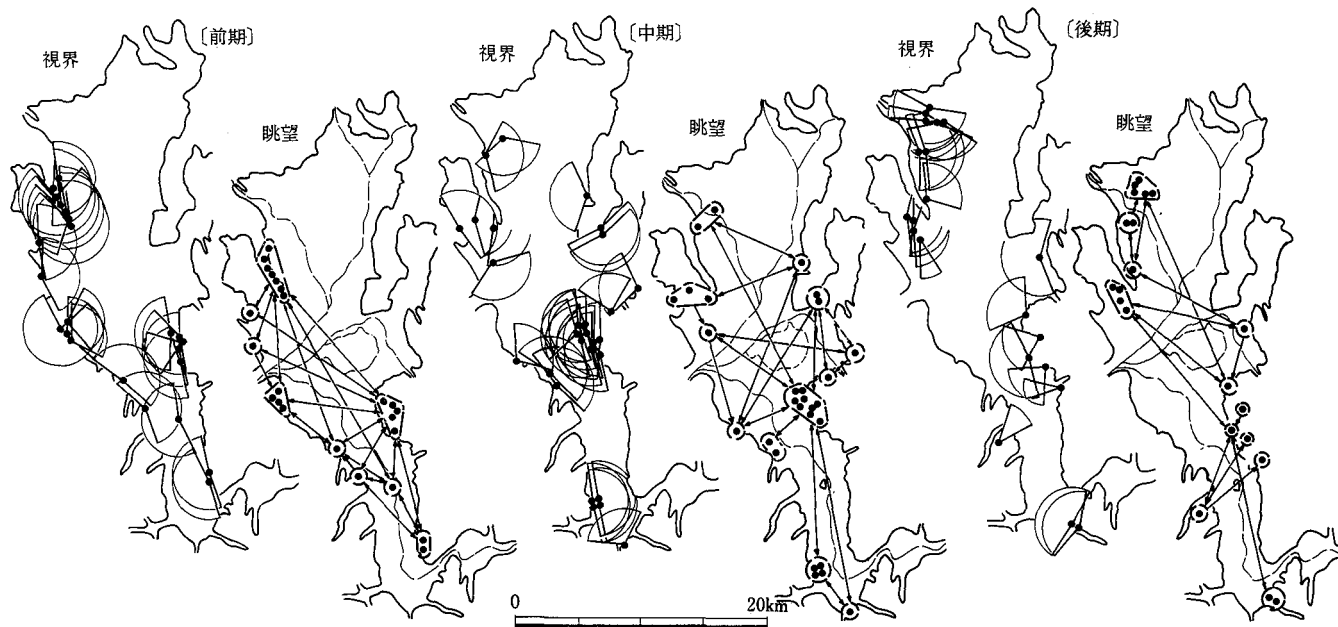


図4 山城盆地における古墳からの視界と眺望関係

変換線に対してパラレルな視界を展開させる。最も卓越した視界を有するのは向日丘陵のグループと茶臼山古墳（ともにⅠ類）である。とくに茶臼山古墳（七）は唯一淀川流域・大阪方面への眺望が可能な古墳である。眺望関係線は隣接する古墳相互において三角形をなし、全体としては閉じた多角形となる。眺望の重複が最も密になる地域は、向日丘陵のⅠ・Ⅳ類の古墳群周辺の段丘・沖積低地、ついで八幡丘陵東縁、城陽丘陵西縁の扇状地・沖積低地の三地域である。

〔中期〕 前期において古墳からの視界が相互に対峙し合う傾向がみられたのに対し、中期古墳の視界方向はより個別の地域に向けられるようになる。例えば、段ノ塚古墳（六）・穀塚古墳（三）や、宇治川を挟む黄金塚一・二号墳（二・三元）・池山古墳（三）・丸山古墳（三）のグループなど（以上すべてⅣ類）は、それぞれ地域的な眺望のまとまりを有する。山城盆地南部では、木津川を挟んで立地する、久津川車塚古墳（三）を中心とするグループと大住車塚古墳（七）のグループが形成する視界は際だった重複関係をみせている。眺望関係線は、前期のように多角形を描くことなく三角形になることが多い。段丘・扇状地などの平坦面・緩斜面上に立地するⅢ・Ⅳ類の増加が、関係線の分散的パターンとなって現れる。

〔後期〕 後期では限られた範囲のみを眺望する古墳が目立つ。例えば、盆地北部の物集女車塚古墳（二）、木津川流域の大谷二号墳（六）、青谷丸山古墳（五）などは、限られた眺望をもった立地をする。後者の場合、開析谷に望む丘陵に立地するために視野が狭い。

これらに対し、後期最大規模の二子塚古墳（三）や桂川左岸のⅢ類大形墳のグループは盆地に対して広い視界を確保している。眺望関係線は総じて分散的であるが、三角形を描く眺望関係線のグループが二ヶ所みられる。一つは桂川

水系の嵯峨野古墳群(一)五・天鼓ノ森古墳(四)・物集女車塚古墳のグループ、今一つは二子塚古墳・坊主山一号墳(四七)・長岡のグループ(三三)三六で構成される群である。二つのグループは眺望関係において、二子塚古墳によって連繫されている。

古墳時代前期から後期にかけての視界・眺望関係線の変化は次のように纏めることができる。前期において、I・II類主体の古墳は相互に眺望関係線で結ぶことが可能であり、一つのユニットとなる。これに対し中期は、IV類の古墳が増加することによって関係線は一部閉じることがなくなり、分散する傾向がみられた。さらに後期では、眺望関係による多角形は描かれなくなる。

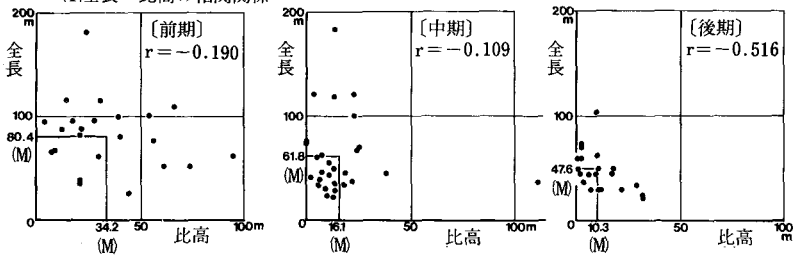
視界方向・眺望関係線の変化は、立地類型の構成比の変化とある程度相関が認められる。前記の眺望関係の纏まりは、I・II類合わせて二〇基(七七%)という高率によるものである。中・後期の眺望関係の分散傾向はIII・IV類の増加、すなわち中期二三基(六二%)、後期一五基(七二%)という構成比によって理解される。盆地北部における丘陵から平坦地への立地の変化、南部における丘陵立地の踏襲が古墳視界の地域的異化をもたらしたといえる。

(6) 相関分析・回帰分析からみた古墳規模(全長)・立地属性の相関関係の変化(図5)

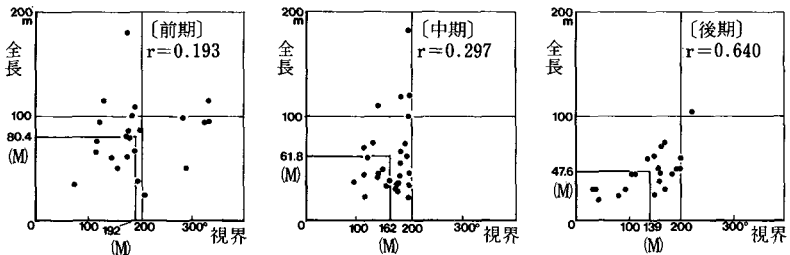
〔相関分析〕 全長と比高の相関関係(図5-1)では、前・中期から後期にかけての相関関係がマイナス〇・一九〇、同〇・一〇九から同〇・五一六へと負の相関を増すことが認められる。これに対し、全長・視界の相関関係(図5-2)では、相関係数が前期〇・一九三から後期〇・六四〇へと増加傾向にある。また、立地属性相互(比高・視界)の相関関係(図5-3)では前・中期がほぼ無相関(〇・〇八一と〇・〇六四)を示すのに対し、後期において負の相関(マイナス〇・四〇八)となる。

69 首長墓系古墳の立地分析

(1)全長・比高の相関関係



(2)全長・視界の相関関係



(3)比高・視界の相関関係

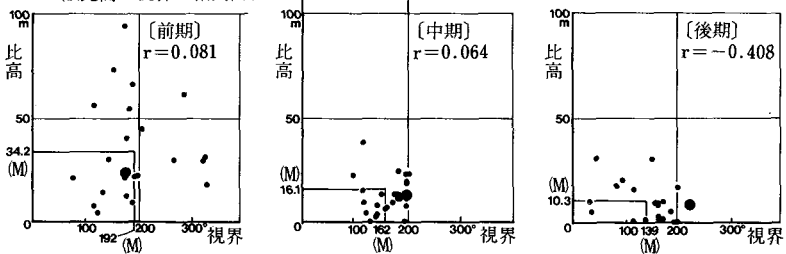


図5 相関分析からみた山城盆地における古墳規模および立地属性の相関関係の変化

(ドットは首長古墳をあらわす。rは相関係数、Mは平均値)

いずれの要素の組み合わせにおいても共通していえることは、前・中期の係数がマイナスイコール・二と相関性が低いことと、後期においては前・中期の結果に比べてより有意の相関値を得ていることである。

「重回帰分析」古墳の全長と立地属性(比高・標高・視界)の重回帰分析を行なうに当たって、従属変数を古墳規模(全長)、独立変数を立地属性として、次のような重回帰モデルを設定した。

$$Y = aX_1 + bX_2 + cX_3 + d$$

ただし、Yは全長、 X_1 は比高

表2 重回帰分析における回帰式
($Y=aX_1+bX_2+cX_3+d$)のa, b, c, dの値

| 時期 | a | b | c | d | r | r ² | S. E. |
|-----|-------|---------|-------|--------|-------|----------------|--------|
| 前期 | 0.387 | - 0.607 | 0.118 | 83.560 | 0.345 | 0.119 | 33.814 |
| 中期 | 1.405 | - 1.355 | 0.258 | 53.623 | 0.446 | 0.199 | 35.640 |
| 後期* | 0.145 | - 0.472 | 0.170 | 44.972 | 0.770 | 0.592 | 13.843 |

ただし、Y：古墳規模（全長）、X₁：比高、X₂：標高、X₃：視界、
r：重相関係数、r²：決定数、S.E.：標準誤差、*：後期の値は5%で有意

X₂は標高、X₃は視界とする。

表2に回帰式における標準偏回帰係数の値、重相関係数、決定係数および標準誤差を時期別に示す²⁾。

前・中期では重相関係数が〇・三四五、〇・四四六と低く、相関は弱い。また決定係数も〇・二一九、〇・一九九となり、式の説明力は良くない。これに対し、古墳時代後期をみると、相関係数は〇・七七〇、決定係数は〇・五九二と有意の相関を示しているといえる²⁾。

(二) 亀岡盆地における首長墓系古墳の立地分析

亀岡盆地は、山城盆地の北西約一五キロメートルの山間に位置し、桂川の上流側に形成された小盆地である。盆地は構造運動の支配を受けた断層角盆地であり、その長軸を北西—南東方向に発達させている²⁶⁾。規模は、長さ約一六キロメートル、幅三〜五キロメートルである。大堰川（桂川）左岸山麓には明瞭な構造線が観察され、山地・低地の地形変換線は直線的となる。地形面は形態的にみて大きく丘陵、段丘（高位よりⅠ〜Ⅲ・Ⅲ面）、沖積低地（Ⅰ・Ⅱ面）、扇状地に分類できる（図6）。旧河道が良く発達する沖積低地Ⅱ面を除いて、各面に首長墓系古墳をはじめとする古墳が立地している。

首長墓系古墳は段丘面を中心に、現在判明しているもので一四基確認されている（表3）。

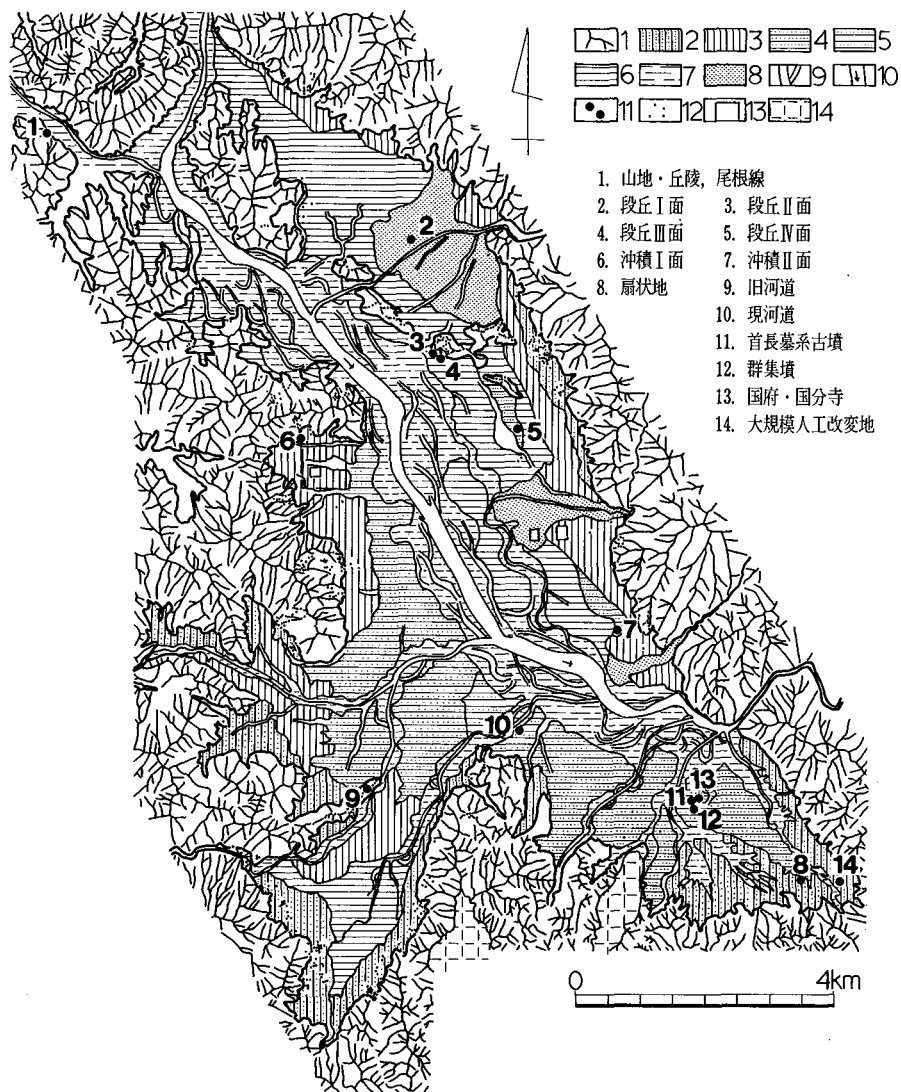


図6 亀岡盆地における首長墓系古墳・群集墳の分布

表3 亀岡盆地における首長墓系古墳

| No. | 古墳名 | 形態 | 立地 (地形面) | 時期 | 全長 (m) | 標高 (m) | 比高(m) (地形面) | 視界(°) (眺望角) |
|-----|--------|----|-------------|------|-----------|-----------|----------------|----------------|
| 1 | うさの古墳 | 後円 | 丘陵・稜 | 後期 | 37 | 135 | 17.2 | 144°10' |
| 2 | 糠塚古墳 | 帆立 | 扇状地 | 中期 | 65 | 129 | 13 | 185°50' |
| 3 | 天神古墳 | 方墳 | 沖積I面 | 中期 | 30 | 約110 | 6 | 143°10' |
| 4 | 坊主塚古墳 | 方墳 | 沖積I面 | 中期後半 | 34 | 約110 | 6 | 143°20' |
| 5 | 千歳車塚古墳 | 後円 | 段丘III面 | 中期末 | 79 | 103 | 3 | 110°0' |
| 6 | 拝田16号墳 | 後円 | 段丘III面 | 後期前半 | 44 | 120 | 8.8 | 69°0' |
| 7 | 案察使1号墳 | 後円 | 段丘III面 | 後期 | 45 | 92 | 3.0 | 87°10' |
| 8 | 三ツ塚2号墳 | 円墳 | 段丘I面 | 中期前半 | 27 | 136 | 19.3 | 38°50' |
| 9 | 穴太12号墳 | 後円 | 丘陵・稜 | 後期 | 28 | 135 | 25 | 74°50' |
| 10 | 加塚古墳 | 後円 | 段丘III面 | 中期 | 60 | 94 | 6 | 76°0' |
| 11 | 野条古墳 | 後円 | 段丘III面 | 中期 | 50 | 104 | 16 | 128°0' |
| 12 | 野条古墳 | 後円 | 段丘III面 | 中期前半 | 40 | 104 | 16.3 | 110°50' |
| 13 | 瀧ノ花塚古墳 | 方墳 | 段丘III面 | 中期後半 | 30 | 104 | 16 | 127°20' |
| 14 | 向山古墳 | 円墳 | 段丘I面 | 前期後半 | 32 | 162 | 26.1 | 32°30' |

形態の略記：後円＝前方後円墳、帆立＝帆立貝式古墳

(1) 古墳立地類型

古墳の例数が少ないため、山城盆地において設定したランク・サイズに基づく立地類型を適用した。

〔前期古墳立地類型〕

- ・IIa類（比高A・視界D）・・向山古墳(二四)

〔中期古墳立地類型〕

- ・IIb類（B・D）・・三ツ塚二号墳(八)、野条古墳(二)、榊塚古墳

(三)、瀧ノ花塚古墳(三)

- ・IIIa類（C・A）・・糠塚古墳(三)

- ・IVb類（D・C）（D・D）・・天神塚古墳(三)、坊主塚古墳(四)、千歳車塚古墳(五)、加塚古墳(一〇)

〔後期古墳立地類型〕

- ・Ia類（A・B）・・穴太一二号墳(九)

- ・Ib類（B・B）・・うさの古墳(一)

- ・IIIb類（D・B）・・案察使一号墳(七)

- ・IVa類（C・B）・・拝田一六号墳(六)²⁷

以上、立地類型は前期一類、中期三類、後期四類に整理することがで

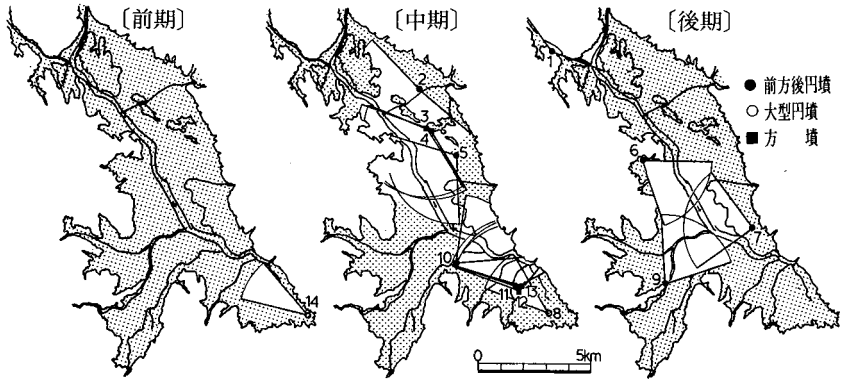


図7 亀岡盆地における首長墓系古墳からの視界

きる。

(2) 古墳立地類型の分布パターン

〔前期〕 前期とされる首長墓系古墳はⅡa類・向山古墳(円墳・径三二メートル)一基のみで、盆地南東端の段丘Ⅰ面上に立地している。狭窄部に位置するため、眺望角は極めて狭い。

〔中期〕 大堰川を挟んで、左岸・盆地北東部に千歳車塚古墳をはじめとするⅣb類のグループ(三ノ毛)が立地し、右岸・盆地南部にはⅡb類のグループ(二ノ三)が立地するように、立地類型の分布にはある程度纏まりが認められる。

〔後期〕 盆地ほぼ中央において大堰川右岸にⅠa(九)・Ⅳa類(六)、左岸にⅢ類(七)が立地する。立地類型に地域的な纏まりは認められない。

(3) 古墳立地類型と墳丘規模の関係

中期を例にみると、立地類型は古墳規模の大きいものから順にⅣb、Ⅲa、Ⅳb、Ⅱb、Ⅳb、Ⅱb、Ⅱbとなる。Ⅲ・Ⅳ類が大形墳に対応し、Ⅱ類は大形墳にはみられないということが出来る。

後期の場合、古墳立地類型は墳丘規模の大きいものから順にⅢb、Ⅳa、Ⅰb、Ⅰa、となり、Ⅰ類が全長四〇メートル以下の小形墳に対応する²⁸⁾。

(4) 古墳からの視界と立地類型 (図7)

〔前期〕 大堰川下流域の極めて限られた段丘面・沖積低地に対してのみ眺望が可能であり、特異な立地を示している。

〔中期〕 前述した立地類型の地域的な纏まりは、眺望関係においても指摘できる。大堰川両岸のⅡ・Ⅳ類のグループは相互に眺望関係を有することなく、固有の視界を形成している。すなわち、Ⅱ類小形古墳群が大堰川下流低地、Ⅲ・Ⅳ類大形古墳が主に中・上流域低地を視界内に確保する。Ⅱ類小形古墳群の立地は、前期における立地を踏襲するものと考えられる。

〔後期〕 後期古墳の立地は前・中期の様相とは異なる。盆地中央において大堰川を挟んで対峙するようにⅠ類(九)、Ⅲ類(七)、Ⅳ類(六)の各古墳が立地し、眺望関係は相互に確保される。

五 山城盆地・亀岡盆地における首長墓系古墳立地の検討

以上、山城盆地・亀岡盆地における首長墓系古墳の立地について定量的分析をふまえて記載をすすめた。これらの結果を要約し、若干の問題点の整理をしておきたい。

(一) 山城盆地における首長墓系古墳の立地

A 比高ランク・サイズは古墳時代前期が三ランク、中・後期が四ランクに分れる。視界ランクは前・中期四ランク、後期三ランクに区別される。古墳規模(全長)は前・後期二ランク、中期三ランクに分けられる。

B Aの組合せから、ⅠⅠⅣ類の立地類型を設定し得た。Ⅰ類…比高視界良好タイプ、Ⅱ類…比高良好タイプ、Ⅲ

類・視界良好タイプ、Ⅳ類・比高・視界不良タイプである。

C 古墳時代前期・Ⅰ類が主として山城盆地北部、Ⅱ類（全体の五八%）が盆地南部に立地する。墳丘規模と立地類型との相関は認められない。眺望関係線は隣接する古墳相互に結ばれ、全体では閉じた多角形となる。

D 古墳時代中期・一つの立地類型が五〇%を越えるような高い出現率はみられず、前・後期に比べ類型数に多様化がみられる。これは当該期における墳丘規模の階層分化の進展と相関するものと思われる。Ⅱ類の立地する範囲は山城盆地南部に限定される。Ⅲ類は盆地南部・木津川右岸を中心に全体の三〇%が立地する。前期同様、規模と立地類型に顕著な相関は認められない。

E 古墳時代後期・Ⅰ類小形墳がすべて盆地南部に立地するのに対し、Ⅲ類大形古墳は盆地北部を中心に分布する。したがって、墳丘規模・立地類型・地域が相関関係にあると判断できる。眺望関係線のパターンの地域分散的傾向は右記の結果を反映するものである。

F C・Eからみて、古墳時代前・中期は立地類型が地域的にはある程度纏まりをみせるが、古墳規模と立地類型は無相関である。これに対し、後期においてこれらは相関性を有するといえよう。

G 相関分析・重回帰分析・Fの結果は、古墳規模及び立地属性の相関係数の時系列的变化によって検証された。相関分析においては、前期から後期にかけて、古墳規模（全長）と視界の相関係数が顕著な増加（ $r \cdot \cdot \cdot 0.19$ → 0.19 ）を示すのに対し、規模と比高においては負の相関（ $r \cdot \cdot \cdot$ マイナス 0.19 → 同 0.516 ）を増すことが判明した。また比高と視界の関係においても前・中期に比して後期に負の相関が認められた。各要素の組み合わせとも、前・中期の無相関に対し、後期において有意な相関を示した。重回帰分析においても、規模

と立地属性（比高・標高・視界）間の重相関係数で、前期〇・三四四、中期〇・四四六、後期〇・七七〇の数値を得た。重回帰式は古墳時代後期において説明力を増す。

(二) 亀岡盆地における首長墓系古墳の立地

A 古墳時代前期…盆地南東隅の狭い段丘面に一基（Ⅱ類・円墳）立地するのみである。盆地の一面を眺望範囲とするにすぎない。

B 古墳時代中期…前々後期を通して全体の六七%（九基）の古墳が立地する。Ⅱ類小形墳が盆地南部・大堰川右岸、Ⅳ類大形墳が盆地北東部・左岸に立地するように古墳規模・立地類型・地域が相関性を帯びる。

C 古墳時代後期…前・中期にほとんど首長墓系古墳の立地をみなかった盆地中央において互いに眺望関係を有する古墳が立地する。

(三) 山城盆地・亀岡盆地における首長墓系古墳の比較検討

山城盆地とこれに隣接する亀岡盆地は古く山陰道によって結ばれ、大堰川（保津峡）を介して同じ水系にありながらも地形的にはそれぞれ独立した閉鎖系となっている。両盆地、すなわち山城と南丹波（口丹波）の首長墓系古墳を、A…規模及び立地類型、ならびにB…古墳の受け皿となる盆地の規模から、若干の比較・検討をしておきたい。Bについては、立地を取り扱った本論の趣旨とやや異なるが、自然環境と首長墓系古墳の関わりについての補論とする。

A 古墳の規模・立地類型の対比

古墳時代前期の亀岡盆地では、山城盆地での最低位の墳丘規模ランクの方墳に対比できるもの一基のみが築造され

ている。古墳時代中期にあつてもその構図は基本的には変わることなく、亀岡盆地最大規模の首長墓系古墳ですら山城盆地での第三ランク上位に位置付けられているにすぎない。

亀岡盆地最大規模古墳・立地類型に対応する類例を山城盆地において求めるならば、前期・向山古墳(四、Ⅱ類)―上大谷八号墳(五、Ⅱ類)、中期・千歳車塚古墳(五、Ⅳ類)―段ノ塚古墳(六、Ⅳ類)、後期・案察使一号墳(七、Ⅲ類)―物集女車塚古墳(五)・今里舞塚古墳(三)・稻荷塚古墳(四、以上Ⅳ類)の対比が可能である。規模からみて同一の階層にある古墳が、前・中期において同じ立地類型となつてゐるが、下位のランクの古墳を対比したところ大半には相関が認められないことが明らかとなつた。

B 盆地規模と首長墓系古墳

盆地規模(面積)に対する首長墓系古墳の築造数・量を算出し、沖積低地、段丘・扇状地など生産基盤の広さと古墳築造の関わりについて検討する。山城盆地は面積二九八平方メートル、亀岡盆地は三二平方メートルの規模を有し、九・一の面積比である²⁹⁾。

首長墓系古墳築造比は、古墳総数から六・一となり、古墳一基あたりの占める盆地面積は、単純計算では山城盆地が三・五平方キロメートル/基、亀岡盆地が二・九平方キロメートル/基と、後者がやや密に築造を行なつてゐるといえる。これを時期別にみると、山城盆地が前期一・一五、中期八・三、後期一三・〇平方キロメートルであり、亀岡盆地では前期三二・〇、中期三・五、後期八・〇平方キロメートルとなる。亀岡盆地での中期古墳の立地の過密さが際立つてゐる。

次に古墳築造の際に要する盆地面積を、古墳築造量から盆地ごとに推定・比較する。首長墓系古墳の築造体積につ

いては石川昇(一九八五a)^②によって算出され、古墳築造にともなう労働量の検討がなされているが、古墳盛土量の体積に占める割合がまだ不明なため、ここでは古墳築造量を古墳全長と置き換え、時期別に全長の総和に対する盆地面積の割合を算定した。したがって得られた値は、盆地低地域を生産基盤と仮定した上での古墳築造に要する生産基盤の広さを意味している。

山城盆地では、前期〇・一五一、中期〇・二四四、後期〇・二七二(単位:盆地面積・平方キロメートル/古墳全長の総和・メートル)と算定された。これに対して亀岡盆地では、前期一・〇、中期〇・〇七七、後期〇・二〇八となる。中期に於いては亀岡盆地では山城盆地の約二分の一の生産基盤によって古墳築造を行なっているが、後期はほぼ同じ面積を必要としていたといえる。古墳時代後期は古墳規模・選地(立地属性)が地域性をともなうて相関する時期であることを前節で明らかにしたが、そういった古墳築造にあたっての規制が、山城、亀岡両盆地に共通して古墳築造量にも関与した可能性をいうことができる。

しかし、その要因などについては今回言及し得ず、今後の検討課題とする。

(四) 課題・展望

古墳を特徴付ける様々な要素の中で、今回は墳丘規模・立地類型(立地属性)の相関関係の検討を行なった。今後の課題として、墳丘主軸の方位、古墳内・外部施設の形態および規模、副葬品の内容などとの比較が必要である。例えば、内部主体と立地類型の相関は、古墳時代後期においてその端緒がうかがわれる。山城盆地北部・Ⅲ類大形墳が内部主体に大形横穴式石室を採用するのに対し、盆地南部・Ⅰ類小形墳が小形横穴式石室もしくは木棺直葬を内蔵するように、内部主体と古墳規模・立地型・地域の相関が認められる^③。選地から埋葬主体の選択に至る造墓プロセス

の型なりパターンなりを、地域ごとにかつ具体的に復元する見通しを得ることができた。立地類型と他の古墳の属性についての検討については稿を改め論じたい。また、周辺地域において同様の作業を試みることによって地域ごとの特質を浮き彫りにしたい。

〈付記〉

本稿は、拙稿〔山城盆地における古墳立地の検討〕『向日市埋蔵文化財調査報告書第二三集・物集女車塚』向日市教育委員会、一九八八）を改稿後、日本地理学会一九八八年度春季学術大会（於日本大学）・歴史地理学会第三一回大会（於滋賀大学）において口頭発表を行なったものに加筆修正を加えたものである。

本稿作成に当たり、次の方々の御高配・御教示を賜った。誌上を借りて深甚の意を表します。（敬称略）

小野忠熙、日下雅義、和田晴吾、原 秀禎、津川康雄、高橋 学、外山秀一、青木哲哉、香川貴志、小橋拓司、橋本雄一、山中 章、山本輝雄、松崎俊郎、秋山浩三、國下多美樹、宮原晋一。

計算機による解析にあたっては橋本雄一氏の手を煩わせた。また、島岡武、上迫誠一、山下博樹、新庄仁美の諸氏により図面浄書・原稿清書等、脱稿の際多大な尽力をいただいた。

注・参考文献

- (1) 石川昇「旦波・山背の前方後円墳と体積」京都考古、四〇、京都考古刊行会、一九八五 a
- (2) 三友国五郎「古墳群と平野」考古学雑誌二二八―四、日本考古学会、一九三八
他に「古墳の地理的位置や古地形」に即して考察するものに以下の文献がある。
藤岡謙二郎『地理と古代文化』大八州出版、一九四六
- (3) 古墳が「丘陵上、傾斜変換線」に立地すると指摘したものには以下の論考がある。
末永雅雄「畿内地方の古墳立地」考古学雑誌、三七―三、日本考古学会、一九五一
- (4) 伊達宗泰「古墳と平野の問題」歴史地理学紀要五、日本歴史地理学研究会、一九五一

- (5) 日下雅義「応仁天皇陵」近傍の地形環境」考古学研究二〇〇一、考古学研究会、一九七五
- (6) 原 秀禎「古墳立地に関する基礎的研究(一)——古市・百舌鳥・三島野古墳群を例として——」(立命館大学地理学教室同致会編『地表空間の組織』古今書院、一九八一)
- (7) 白石太一郎「畿内における大型古墳の群消長」考古学研究、一六一三、考古学研究会、一九六九
- (8) 田中晋作「古墳群の構造変遷からみた古墳被葬者の性格」古代学研究、九八、古代学研究会、一九八三
- (9) 和田晴吾「向日市五塚原古墳の測量調査より」(『王陵の比較研究』京都大学考古学研究室、一九八三)
- (10) 樞本誠一「大型古墳の立地について——奈良県下における前・中期古墳」(『考古学論叢』関西大学考古学研究室、一九八三)
- (11) 岸本道昭「前方後円墳成立期の播磨・揖保川地域」考古学研究、三三三三、考古学研究会、一九八六
- (12) 今尾文昭「高地・丘陵・低地の前期古墳と地域性」(『同志社考古学シリーズⅢ・考古学と地域性』同志社考古学シリーズ刊行会、一九八七)
- (13) 石川昇「大阪に築かれた古墳の総体積と労働力」考古学研究、二九一三、考古学研究会、一九八四。同「大和の前方後円墳と体積」考古学研究、三二一一、考古学研究会、一九八四。前掲(1)。同「前方後円墳の総体積から五世紀の政権構造を模索する」考古学研究、三三一一三、考古学研究会、一九八五b。同「近江の前方後円墳と畿内政権」京都考古、四六、京都考古刊行会、一九八七
- (14) 辰巳和弘「静岡県における大型古墳の墳丘体積からの試論」(『同志社考古学シリーズI』同志社考古学シリーズ刊行会、一九八二)
- (15) 高橋誠一「大和における前方後円墳(例会要旨)」人文地理、三九一一、人文地理学会、一九八七。本論は、古墳規模の区分に、ランク・サイズを初めて用いたものである。
- (16) 首長墓系古墳の認定基準として、次の条件を設定した。①前方後円(方)形もしくは帆立貝形の平面形態を取る古墳。②直径(一辺)三五メートル以上(山城盆地例)、二五メートル以上(亀岡盆地例)の規模を有する円・方墳。なお、後述する回帰分析データベースには、①のみを用いた。
- (17) 顕著な河谷低地とは、河川本流に合する主要な支流の形成した河谷を含む。山城盆地では小畑川・小泉川、山科川などが

これに当たる。開析谷等は計測の際、考慮にいれない。

(18) ここで図中の扇形の半径は一律四キロメートルとした。

(19) 立地属性として古墳の立地する標高を重回帰式における独立変数として設定したが、今回の考察からは除外している。

(20) 大塚弥之助・堤圭三郎・高橋美久二・未本信策「京都府遺跡地図」京都府教育委員会、一九七二。平良泰久・下村晴文

編「南山城の前方後円墳・龍谷大学文学部考古学資料室研究報告1」龍谷大学文学部考古学資料室、一九七二。奥村清一

郎「各地域における最後の前方後円墳・西日本Ⅲ・京都府南部」古代学研究、一〇四、古代学研究会、一九八四。平良

泰久他「京都府遺跡地図、第五分冊」京都府教育委員会、一九八五。平良泰久「古墳の編年を総括する・山城」季刊考古

学、雄山閣出版、一九八五

(21) 円・方墳に関してはナンバーを付さない。なお、表1においてデータ未記載のものは現地形が改変を受けたために計測不可能であった。

(22) 長岡京市所在の七ツ塚古墳は一九八七年秋の発掘調査で、全長二〇メートル以上の前方後円墳であることが判明した。今回の報告文中に含まれていない。

山本輝雄「長法寺七ツ塚古墳群」(「長岡京市文化財調査報告書」第二冊、長岡京市教育委員会、一九八八)

(23) 古墳からの視界が図化されたのに次の報告がある。

成瀬敏郎「石鎚山・吹越古墳群の位置と地理環境」(「石鎚山古墳群」、広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター、一九八一)

(24) 古墳時代前・後期の首長墓系古墳のデータを総合した場合の重回帰係数・決定係数は、 0.4818 、 0.236 と算出された。また個々の属性間の単相関値はほぼ無相関の結果を得た。

(25) 重回帰式より導き出された残差に基づく立地型の地理的分布モデルについては、現在検討中であり、再稿を期したい。

(26) 井上類績「亀岡盆地における大堰川流路変遷の復原」人文地理、二一六、人文地理学会、一九六九

(27) IV類のうち、やや視界が良好なためA類とした。

(28) 亀岡盆地には、古墳時代後期の所産と考えられるもので、四四の群集墳(古墳群)が存在する。各群集墳中最大の古墳を選び、古墳(円・方墳)の径(辺)を従属変数、比高・標高・視界・立地する斜面の傾斜角を独立変数として重回帰式を設

定したところ〇・三九一（決定係数〇・一五三）との重回帰係数を得、古墳の大きさが立地属性によって説明し難いことが明らかとなった。

(29) 沖積低地、段丘・扇状地の面積にほぼ相当する。

(30) 前掲(1)

(31) 「横穴式石室不採用」の原因を、在地の栗隈県と大和政権の関係で論じる試みがある。

平良泰久「南山城の後期古墳と氏族」京都考古、一四、京都考古刊行会、一九七五